

ビジネスを経済学的な頭で考える

久保研介

商学部 准教授

産業組織論と計量経済学を研究分野としています。3年生は19名、4年生は16名。ビジネスニュースのディスカッションや競争政策をテーマとするインゼミが特徴です。

久保研究会では「ビジネスを経済学的な頭で考え、手を動かして分析する」をモットーに、産業組織論を中心とする応用ミクロ経済学の研究を行っています。産業組織論とは、企業の行動を理論的に説明したり、市場で起こるさまざまな事象を理解したりするための学問であり、政府による政策立案や法執行において活用されています。例えば、政府が企業に影響を及ぼすような政策変更を行う際は、産業組織論の考え方に基づいて社会への影響が評価されます。また、政府が競争政策に基づいて企業の行動を規制するといった場合も、産業組織論の考え方や分析手法が用いられます。さらには、シンクタンクや金融機関のアナリストが行う産業分析においても産業組織論の手法が用いられています。

ゼミの活動としては、三田祭論文と卒業論文の執筆に加え、時事的なビジネスニュースについて経済学的観点からのディスカッションを行ったり、競争政策上の問題を題材にした他大学と

のインゼミを開催したりしています。本年度は「アプリストア手数料問題」「大手IT企業によるスタートアップの買収」および「デジタル広告市場における独占」を取り上げ、3つのゼミ間で発表と討論を行いました。また、学内のゼミと合同で三田祭論文・卒論を発表する学会形式のインゼミにも参加し、研究成果を披露しました。

これらの活動を通じて社会の仕組みを学ぶ一方で、スキルの習得にも力をつけています。特にサブゼミでは、統計分析ソフトウェアの使用方法を上級生が3年生に教えるという方式をここ数年採用してきました。2年前から使用しているオープンソースのソフトウェアの使い方に関しては、私の方がゼミ生から教わるが多く、半学半教とはこういうことかと実感させられます。ゼミでの学習を通じて、学生たちのビジネスを見る目が養われると同時に、分析能力が向上することを期待しています。

現実の問題解決に役立つ考え方を学ぶ

難波慶成君 商学部4年

久保ゼミでは、企業間の競争や市場の構造についてデータに基づいて考察する実証産業組織論を学びます。産業組織論の特徴の一つは企業や消費者の行動をシンプルに変数の連関によって説明できることです。経済現象の本質を単純な原理に落とし込むことで、経済の全体像が俯瞰でき、反実仮想に基づく政策の分析等が可能となります。

久保ゼミでの学びはあらゆる面で私の糧になっています。仮定を置いて事象を単純化する経済学の考え方はさまざまな問題の解決において役立っています。また、モデルを検証するツールとして学んだプログラミングの知識は、インターン先でのデータ分析業務に活かされています。



視覚にまつわる心身の本質を探究する

森

将輝

環境情報学部 専任講師

環境情報学部森将輝研究室は、20名弱のメンバーとともに、実験・数理・臨床心理学、身体教育学などの専門領域から多種多様な知覚・認知現象の解明を目指しています。

他者の視線方向や物体の光沢感はどうのように知覚されているのでしょうか。見た情報はどのように処理されていくのでしょうか。それらの情報が状況や個人により異なると認識されるのはなぜでしょうか。私は、このような疑問

に関して研究しています。特に、実験心理学、数理心理学、臨床心理学、身体教育学などの専門領域から空間情報に関する視知覚現象を研究しています。具体的な研究テーマは、数理モデルを用いた視線知覚の解明、視覚情報処理の数理モデル構成、精神・発達障害者における質感知覚特性の解明などです。

湘南藤沢キャンパスで開講している研究会「知覚と認知の心理学」では、5つのテーマ「社会性」「身体性」「質感」「空間」「個人差」に関する知覚・認知現象を研究しています。研究室メンバーは、自閉スペクトラム症者における対人関係や書字運動の困難さを生む要因、ペロア生地画像の高級感と画像統計量の関係、ダンスの本質的な美しさ

など、バラエティに富んだ研究を行っています。これらの研究を通して、知覚・認知メカニズムを解明し、視覚的な演出技術の向上や精神・発達障害者にとって生活しやすい環境づくりに寄与することを目指しています。

研究室のモットーは、「土台となる基礎研究に徹底的に取り組み、応用研究の芽を生み出す」です。具体的には、実験心理学的・数理心理学的に知覚・認知現象のメカニズムを探究し、臨床心理学・身体教育学分野の発展にも波及するような研究ができればと考えています。

視覚科学は、心理学、工学、数学、神経科学などにまたがる学際性に富んだ研究領域です。そこで、塾内外の研究者と異分野連携・共同しながら研究に取り組んでいます。また、研究室メンバー内でも互いに学び合いながら研究に打ち込んでいます。「半学半教」に根を下ろした協力の輪に感謝しながら、今後も視覚にまつわる心身の本質を紐解いていきたいと思っています。

好奇心に忠実に、研究に没頭できる場

たかの ゆうか

高野裕香君 環境情報学部4年

研究室の扉を開けると、大抵いつも誰かがユニークな心理実験に取り組んでいます。1年生から大学院生まで、文理問わず多様なバックグラウンドを持つ学生が所属しているのが森将輝研究室の特徴の一つです。そこでは、ユニークな研究アイデアが日々活発に、和気あいあいと議論されています。

私は、食の好き嫌いの個人差の研究を通して、自閉症者の方が生きやすくなる手助けをしたいと考えています。研究を進めるにあたり、森先生は日頃から些細なことでも相談に乗ってくださるので、好奇心に忠実に、自分の研究に没頭できる場がここにはあります。

